

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530956

研究課題名(和文) 教育における宗教性に関する思想史的・人間学的研究 「京都学派」教育哲学を中心に

研究課題名(英文) Education and Religion in Kyoto School of Philosophy of Education

研究代表者

西村 拓生(Nishimura, Takuo)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：10228223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：教育における宗教性は、教育という営みの根底を考える際に非常に重要な契機である。この問題を考える際に思想史的に注目すべきなのが、京都学派の哲学に源流をもつ教育哲学の系譜である。この研究では、京都学派教育哲学の諸思想を分析し、その中に、「生命性と超越」を鍵概念とする系譜、「臨床性から公共性」という志向をもつ系譜、そして「言語の限界と可能性」をめぐる系譜を見出した。さらに、その分析を基盤として、教育における宗教性・超越性に関する多様な思想史的・人間学的研究を行ない、包括的・体系的な研究への足掛かりを構築した。

研究成果の概要(英文)：Religiousness in education is one of the most important elements in the study of education. When we consider this issue, the lineage of philosophy of education originated from the Kyoto School of philosophy is worthy of note. Our cooperative research analyzed theories of the Kyoto School philosophy of education and discriminated three lineages of thoughts, the keywords of which are as follows: "life and transcendence", "from clinical practice to publicness", and "limitation and possibility of language". On the basis of the analysis, we studied religiousness and transcendence in education variously in the contexts of history of educational thought and educational anthropology and have gained footholds for the comprehensive and systematic study on the issue in the future.

研究分野：教育哲学

キーワード：京都学派教育哲学 宗教性 超越性 生命性 臨床性 公共性 言語

1. 研究開始当初の背景

人類史の大部分において、人間形成の基盤は宗教にあった、と言っても過言ではない。しかし第二次大戦後の日本では、「教育と宗教」という問題は一般にも学問的にも看過されがちであった。その一方で近年の日本社会では、いわゆる「スピリチュアリティ」に対する関心はむしろ高まっており、既成宗教に飽き足らない人々がオカルティズムに流れる風潮も見受けられる。また世界的にも、ポスト冷戦の状況下、イデオロギー対立に代わり諸宗教間の対立を如何に克服するのかが、あらためて人類の課題と目されている。「教育と宗教」というのは、今日、きわめてアクチュアルなテーマである。にもかかわらず、これまでわが国の教育学において、この問題が十分に研究されているとは言いがたい。

2. 研究の目的

教育と宗教の関係を問う際には、狭義の「宗教教育」の問題だけでなく、既成宗教に限らない、あるいは既成宗教の中に共通して見られる、いわば「宗教性」一般、ないし「超越」の契機が、人間形成にとって如何なる意味を持つのかを問う必要がある。そのようなアプローチをしてきた思想として注目すべきが、いわゆる「京都学派」の哲学に源流を持つ教育哲学の系譜である。「京都学派」教育哲学の特質とは何か、ということ自体が本研究の課題であるが、あらかじめ言い得ることは、その思想的源流である「京都学派」の哲学が、禅仏教や浄土真宗といったわが国固有の「靈性」に根ざしつつも、西洋近代哲学との対峙を経て、普遍的な文脈において「宗教性」や「超越」を論じようとする志向をもったものであった、という点である。それ故、「京都学

派」教育哲学から「教育と宗教」の問題にアプローチすることは、一方で、特定の既成宗教・宗派の立場からではなく、一般的に「宗教性」や「超越」の人間形成にとっての意味を問おうとする際に、一つの確実な拠り所を与えてくれるものと期待される。

3. 研究の方法

(1) 宗教性・超越性をめぐる「京都学派」教育哲学の諸系譜の思想史的検討

一口に「京都学派」教育哲学と言っても、詳細に見るならば、そこにはいくつかの思想的系譜を見出すことができる。さしあたり仮説的には、木村素衛 - 蜂屋慶、下程勇吉 - 上田閑照、田辺元 - 森昭、という三つの源流があり、宗教性・超越性に関しても、これら三つの系譜には、それぞれかなり異なった論調があると見受けられる。そこで、西田幾多郎から矢野智司や田中毎実に至る多くの教育哲学者の議論を、それらの思想的な継承関係に着目して分析し、思想史的な見取り図を描く。

(2) 教育における宗教性・超越性に関する包括的な人間学的研究への着手

上記(1)の思想史的検討を踏まえ、「京都学派」教育哲学の基盤の上で、あらためて教育における宗教性・超越性に関する包括的な人間学的研究を遂行する。ただし、これはきわめて大きな課題であるので、本研究ではさしあたりメンバー各自が、分担した思想史的分析に立脚した個別の教育人間学的な論考を執筆し、その相互批評を通じて、包括的な共同研究への橋頭堡を構築する。

4. 研究成果

(1) 宗教性・超越性をめぐる「京都学派」

教育哲学の諸系譜の思想史的検討について

共同研究では、様々な京都学派関連の文献を手分けして検討し、その結果を共有すると共に、特に毎年夏に行なった研究合宿での集中討議を通して、その整理を行なった。また研究合宿では京都学派の系譜を受け継ぐベテラン研究者を招いて談話を伺い、それを契機に討議を行なった。これらの共同研究の成果を総括したのが、研究代表者の西村による論文である。

この論文では、今日、京都学派の系譜を受け継ぐ代表的な研究者である矢野智司、田中毎実、皇紀夫という三氏の思想を系譜論的視点から検討し、それぞれの思想的体質や議論の焦点を敢えて対比的に捉えることを通じて、京都学派教育人間学の暫定的なマッピングを試みた。その概要は以下の通りである。矢野氏の場合、氏の理論の中でおそらく最も広く受け入れられている「発達／生成」論の構図は、西田幾多郎 - 木村素衛 - 蜂屋慶 - 矢野智司という思想的系譜上に位置づけることが可能である。この系譜において注目すべき人間学的契機は、「技術」に媒介された生命性であり、絶対的な肯定性に「包越」された価値志向性である。田中氏の場合、その臨床的人間形成論は、晩年の森昭に特徴的に見られる、京都学派に特有の「臨床性」の契機が、「公共性」という社会的・政治的な関係にかかわる問いの方向へと展開されている。結局のところそれは、田辺元が森に投げかけた課題を、森が突き詰めた極限から反転して、あらためて受けとめ直そうとするものである。だとすると、この田辺元 - 森昭 - 田中毎実という思想的系譜には、「臨床性から公共性へ」という、先の西田 - 木村 - 蜂屋 - 矢野の系譜とは異なる、京都学派におけるもう一つの人間学的契

機を認めることができる、さらにもう一人、京都学派の思想圏内で「臨床」にかかわる思想を展開している存在といえば、皇紀夫である。その臨床教育学は一見、田中の臨床的人間形成論とも、また矢野の生命論的な人間学とも、かなりトーンが異なるが、西田哲学の展開を言葉で言い現わすことのできないことを言うことをめぐる「一種の言語哲学」として読むならば、教育を語る言葉に定位して、そこに「差異を仕掛ける」ことにより、新しい教育の意味を作り出そうとする皇の臨床教育学は、まさに言語哲学としての西田哲学の根本的な構えを受け継ぐものと見ることが可能である。ここに、西田から下程勇吉や上田閑照を介して皇につながる、もう一つの京都学派教育哲学の系譜を識別することができる。そのキーワードは、言葉の内と外、その可能性と限界をめぐる思索である。

京都学派教育哲学を手がかりに宗教・超越を考える際には、この学派における上述のような思想の重層性をまずは十分に顧慮すべきことが明らかになった。

(2) 教育における宗教性・超越性に関する包括的な人間学的研究について

上述のような包括的な思想史の見取り図を描きつつ、共同研究では、各メンバー（研究分担者および研究途中から若手の京都学派研究者の神戸と山田に研究協力者として参加してもらった）が、それぞれの研究関心と共同研究での分担課題に応じて、多様な人間学的研究を遂行した。その個別の成果は後掲の論文、著書等に置いて発表されているが、とりわけ共同研究の総括として、平成26年10月の教育思想史学会第24回大会において、研究代表者の西村が企画者・司会者としてコロキ

ウムを企画し、メンバーが研究報告を行ない、研究成果を学会に問うた。報告者は研究分担者の岡本と山内、研究協力者の山田と神戸、討議の際のコメンテーターを分担者の吉田が務めた。さらにそこでの報告の概要を論文化したものが、同学会の学会誌『近代教育フォーラム』第24号に掲載されることになっている。各報告の概略は以下の通りである。

山田の報告 「高坂正顕 - 歴史的世界における主体形成の教育思想」は、従来の京都学派論において「イデオロギー」的批判と「生成論」的再評価の間で忘れられてきた高坂正顕の教育思想を、あらためて正面から検討したものである。教育学の領域でなされる「京都学派」再評価では、彼らが歴史哲学の問題に関心を寄せたことについてほとんど言及されないが、高坂の教育論における「歴史」の強調は、西田の議論を十分に継承するものと言ったことができ、またこの点は、教育を「主体」形成の営みとして論じ、その際の主体がすなわち歴史形成的な主体であることを強調する木村素衛の教育論にも共通する、ということが指摘されている。

岡本の報告 「京都哲学のポテンシャルをめぐって - 「己事究明」というスタイル」は、京都哲学に人間と教育を根底から問い直し、変容させるポテンシャルがあるとしたら、それは「己事究明」というこの学派特有の思想的実践的スタイルにあるのではないかと論じる。すなわち、京都哲学は自己の生を棚に上げて他人事のように事象を論じることを慎むスタンスをもっているが故に、語られた「こと」を自分の事として聴き（歴史的身体としての自覚）どのように「世界」を受け取り直せるのか（「世界」の再分節化）を試みる過程を経ないで、外面的に下される京都学派の評

価は一面的にならざるを得ない。言語論的転回が明らかにしているロゴスの主観的構成を促すものは、それと同時的な、「聴く」というメタファーで表現されてきた、勝れて受動(パトス)的な働きでもあるはずであり、このような「聴く」自己の覚醒こそが、相対主義的カオスを防ぎ、研究者の生命に生成の「動力」を与える契機となる、と。

神戸の報告 「「おのずから・みずから」の働きとしての教育 - 「京都学派から」とは別のアプローチの提言」は、京都学派も含む日本の教育思想史研究を行なう際には、日本思想史に特有の「おのずから / みずから」というキーワードに着目する必要がある、と提案している。とりわけ仏教思想の検討が必要であるが、たとえば禅宗がみずからの否定によっておのずからの働きへの融合相即を目指すのに対して、浄土宗では自力(みずから)と他力(おのずから)に絶対的な断絶を見出す。両者は、まったく違った仕方ですれぞれに「おのずから」と「みずから」の対立と融和を捉え、しかし相互に影響しあって日本の思想的特性を形成してきた。この点への注目が、西田幾多郎と三木清の思想的特性の際を把握する際にも有効である、と指摘されている。

山内の報告 「西田幾多郎「教育学について」を読む - 「徴候を読み取る知」についてのメモ」は、京都学派の思想を研究する際の従来とは異なるオルタナティブな読解の可能性について論じている。その際に手がかりとされるのが、ロラン・バルトの言う「第三の意味」である。たとえば西田の「教育学について」では、「単に……ではなく、……でなければならない」式の言説が執拗に繰り返され、31回も登場している。このような、「残り屑」のように余分な、しかし確かな手触り、物質

性をもった「第三の意味」に着目して、西田をはじめとした京都学派の思想を読み直す可能性を山内は提起している。

以上のように、京都学派の思想を手がかりとした教育における宗教性・超越性に関する人間学的研究は、さしあたりメンバー各自において多様、多彩な展開を見せており、今回の共同研究で構築された橋頭堡から、さらに包括的・体系的な人間学的研究を共同で展開することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

山田真由美、高坂正顕 - 歴史的世界における主体形成の教育思想、近代教育フォーラム、査読無し、第24号、2015年、掲載頁未定

岡本哲雄、京都哲学のポテンシャルをめぐって - 「己事究明」というスタイル、近代教育フォーラム、査読無し、第24号、2015年、掲載頁未定

神戸和佳子、「おのずから・みずから」の働きとしての教育 - 「京都学派から」とは別のアプローチの提言、近代教育フォーラム、査読無し、第24号、2015年、掲載頁未定

山内清郎、西田幾多郎「教育学について」を読む - 「徴候を読み取る知」についてのメモ、近代教育フォーラム、査読無し、第24号、2015年、掲載頁未定

西村拓生、現場というテキスト、テキストという現場、教育哲学研究、依頼論文、第111号、2015年、掲載頁未定

吉田敦彦、ブーバーの対話哲学とシュタイナー学校の教育現実、理想、依頼論文、第694号、2015年、13-29頁

井谷信彦、風景芸術と教育の「再生」、理想、依頼論文、第694号、2015年、30-41頁

井谷信彦、タクトの啓発と意味生成の螺旋、学ぶと教えるの現象学、査読無し、第16巻、2015年、27-40頁

Takuo Nishimura、Can We Find an Alternative to Mainstream of Modern Education in the Idea of the Kyoto School?、臨床教育人間学、査読無し、第13号、2014年、46-55頁

西村拓生、「京都学派」教育人間学の暫定的マッピングの試み、近代教育フォーラム、査読あり、第23号、2014年、77-87頁

〔学会発表〕(計6件)

山田真由美、高坂正顕 - 歴史的世界における主体形成の教育思想、教育思想史学会第24回大会、コロキウム4、2015年10月11日、慶應義塾大学(東京都港区)

岡本哲雄、京都哲学のポテンシャルをめぐって - 「己事究明」というスタイル、教育思想史学会第24回大会、コロキウム4、2015年10月11日、慶應義塾大学(東京都港区)

神戸和佳子、「おのずから・みずから」の働きとしての教育 - 「京都学派から」とは別のアプローチの提言、教育思想史学会第24回大会、コロキウム4、2015年10月11日、慶應義塾大学(東京都港区)

山内清郎、西田幾多郎「教育学について」を読む - 「徴候を読み取る知」についてのメモ、教育思想史学会第24回大会、コロキウム4、2015年10月11日、慶應義塾大学(東京都港区)

西村拓生、現場というテキスト、テキストという現場、教育哲学会第57回大会、課題研究、2014年9月14日、日本女子大学(神奈川県川崎市)

Takuo Nishimura、Can We Find an

Alternative to Mainstream of Modern Education in the Idea of the Kyoto School? The 6th International Colloquium between the Institute of Education, University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto University (シンポジウム), 2013年9月20日、京都大学(京都市左京区)

〔図書〕(計5件)

吉田敦彦 他(共著)、ミネルヴァ書房、『講座ケア第3巻 ケアと人間：心理・教育・宗教』、共著、担当箇所「人類史的な問いとしてのケア ポスト個人化時代の立ち方とつながり方」、2013年09月、207-223頁

西村拓生、東京大学出版会、『教育哲学の現場 物語りの此岸から』、2013年6月、総頁数：262頁

井谷信彦、京都大学学術出版会、『存在論と宙吊りの教育学 ポルノウ教育学再考』、2013年4月、総頁数：526頁

西村拓生 他(共著)、東京大学出版会、『教育人間学 臨床と超越』、共著、担当箇所「第6章 マルクス主義者のシラー論 水平軸と垂直軸の交点としての美的教育」、2012年8月、165-200頁

Takuo Nishimura et al. (共著)、Springer, Education and the Kyoto School of Philosophy, 担当箇所 Chap.6. The Kyoto School and the Theory of Aesthetic Human Transformation, 2012, pp.65-76

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 拓生 (NISHIMURA, Takuo)
奈良女子大学・研究院人文科学系・教授

研究者番号：10228223

(2) 研究分担者

岡本 哲雄 (OKAMOTO, Tetsuo)
関西学院大学・教育学部・教授
研究者番号：60268464

吉田 敦彦 (YOSHIDA, Atsuhiko)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：20210677

山内 清郎 (YAMAUCHI, Seiro)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：80351253

井谷 信彦 (ITANI, Nobuhiko)
武庫川女子大学・文学部・講師
研究者番号：10508427

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

辻 敦子 (TSUJI, Atsuko)
奈良女子大学・研究院人文科学系・助教

神戸 和佳子 (GODO, Wakako)
東京大学大学院・教育学研究科・院生

山田 真由美 (YAMADA, Mayumi)
慶応義塾大学大学院・社会学研究科・院生